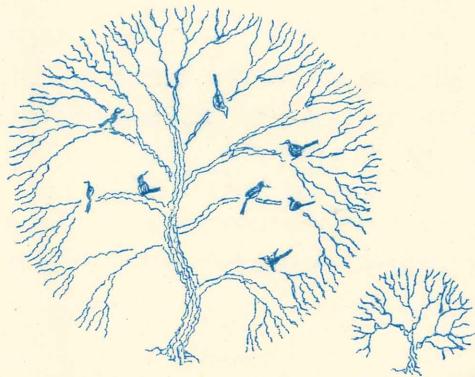


熊本県玉名市繁根木

# 伝左山古墳



昭和 45 年 12 月

玉名市文化財  
保護委員会

会長 田添夏喜

熊本県玉名市繁根木

## 伝左山古墳

### 目 次

1 所在地	1
2 墳形	1
3 弁見の端縁	1
4 内部構造	1
(1) 横穴式石室	1
(2) 石棺について	2
5 副葬品について	2
(1) 第一期弁見副葬品	2
(2) 第二期弁見副葬品	3
○ 直刀身	3
○ 槍身	4
○ 短甲	4
○ 異形の鉄製品	4
○ 呪	4
○ 頸鎧	4
(3) 第三期弁見副葬品	6
A 装身具	6
イ 金製垂飾り付耳飾り	6
ロ 金製鏡	7
B 玉類	7
○ 勾玉	7
○ 管玉	7
○ 小玉	8
C 武具類	8
D 馬具類	8
6 まとめ	8

1 所  
玉名  
にあり  
伝左山  
た。

2 墳  
しぜ  
高さ南  
坦に均  
呈して  
現在よ

3. 弁見  
安政  
の後方  
事中小  
弁見し  
築き、  
面に文

4 内部  
この  
上層の  
(1) 横

と二  
石室  
西に  
玄  
周壁  
の形  
死床  
個を  
リ四  
左安  
一  
前

# 玉名市繁根木

## 伝左山古墳

### 1. 所在地

玉名市文化財保護委員会長 田添夏壽

玉名市繁根木、玉名市役所の西約60メートルの、国道208号線に沿う高台上にあり、笄見当初繁根木の古墳の名称で紹介されたが、この丘陵が小山を形づくり伝左山と呼ぶ。昭和40年以來この山の名を用いて「伝左山古墳」というようにした。

### 2. 墓形

しぜんに形成された小丘上に営なまけたらしく、下底の直径およそ35メートル、高さ南側で約5メートルの円墳にして、二段積築の痕跡が認められる。墳丘上は平坦に均らされ、明治18年来一石祠をまつる。裾は北及び東南部が着るしく変貌を呈して円墳の常規を乱しているが、上部はおおむね原型を保つている。這喰當時は現在よりはるかに拡張された境内敷地をもつていたことが推測される。

### 3. 穂見の端緒

安政4年頃、繁根木八幡宮西方の地の倉庫建設に際し、寿福寺（現県立美術館付近）の後方丘陵地の山上を崩してこれに充てたため連日数百の人夫により搬出させ、工事中小山の中腹に偶然一窟が開口した。翌日内部を探検し、多くの副葬品や石室を発見した。高貴な人の墳墓であるとおそれを感じ、副葬品ももとにかえし、石壁を築き、「古墳」の二字を刻銘して立てその口を封じたという。今なお残つている石面に文化五年銘の見ゆる角石がそれであることに間違はない。

### 4. 内部構造

この古墳内部構成に二形式があるとされ、一つは板石小口積み横穴複室と、その上層の封土中央に家型系の石棺を封するという複式の珍らしい古墳である。

#### (1) 横穴式石室

二段積築とみらるる封土の下底に築かれている。奥室の南側壁の天井に接するところに1人が出入できる程度の破壊口が開く。これ安政年間の破壊口である。石室はおおむね封土の南寄りの下底にあたり、複室の主軸を東西にとり、前室を西に奥室を東にして築かれている。

『玄室（奥室）では、安山岩の薄い板石を小口を美しく室内に向けて積み上げ、周壁とし、東西を2、40メートル、南北を1、80メートルの大きさの隅丸角型の形式につくり、これに接して6個の薄手のない板石を床面の四方に低く組んで死床室とし、また東、南、北の三面のそれぞれ中央よりやや下のあたりに角石一個をそれを短く突起させ、石棚のあつた名残りを止めている。このあたりより四隅を丸くし、1、80メートルの高さのところで丸型に組み、広い板石二枚を矧ぎ合わせて覆い天井部をつくつてある。

割石の小口の大きさや並べかたがよく拗り井然とした構造はこの古墳の特徴の一つといえよう。また内面限なく厚てに朱が塗られている。

前室では、高さ0、8メートル、長さ1、70メートルに、奥室南北辺とほぼ

発見された  
に設置され  
たが、この  
しき回に亘  
のであるか  
い。其の実  
を残し、2

同じ長さに幅をとつて祭き、南北壁と東面北半を板石小口積みにして、二  
札を三個の大石で覆い天井部をつくる構造となつてゐる。

前室と奥室との境界となる障壁の角に寄せ、幅40センチ、高さ80  
センチの空間をとり、両側に入石二個を立て、その上に長さ1.20メー  
トル、径22センチほどある長い大石をのせて第二羨門をつくる。

第一羨門部は大部分が崩壊してゐて、その形状を明確に知ることは困  
難のようであるが、傾いた平たい大石と、多少貧弱ではあるが羨門石と  
見られる大石やその他の石の存置状態で幸うじて原形を想定し得る。第  
二羨門部より西へ1.90メートルのところに径20センチ内外くらい  
の石塊を幅1.20メートル、高さ0.8メートルほど積み上げ、粘土  
や土などをつめてかため、第一羨門部を封塞した状態は原形のまま残  
つてゐる。羨門石組みが第二羨門に比し極めて貧弱であるため、圧力に  
堪えきれず崩壊したものであると思われる。

また発見当初、奥室の北と東の全面に幅90センチ、高さ40センチ  
ほどの、支柱で支えられた石棚の施設があつたことが伝えられているが  
細部についてのことはわかつていない。

## (2) 石棺について

横丘上中央にまつろむ石室の直下で、横穴式石室奥室の上層にあた  
る封土中に埋葬され、凝灰岩2個をくり抜いて棺身と棺蓋とをつくり、  
その長さおよそ2メートル、幅88センチ、高さ50センチの  
大きさといふのであるからかなりの大きさをもち、山下古墳後円部の  
石棺にくらべると長さが30センチ短かく、横幅が8センチほど長  
くなり、形式も異なるようであり、小路古墳石棺と類似する点多い  
ように思われる。

棺身の両端に縄かけ突起の欠けあとがあり、棺蓋は棺身にくらべ  
て割に大きくてその高さを50センチにし、印籠蓋のように互いに相  
接合する形式になるといふ。

石室を設けず、直接封土中に收められていることなどすべてが  
春日山古墳出土の副葬品については、発見の時期の上か三期に分  
られる。即ち、安政千年壁土採取の土木工事を古墳とともに始めて  
発見されたものを第一期とし、明治17・8年頃福原岱郎氏の調査  
の際に発見されたものを第二期とし、昭和40年、内部清掃と実測  
調査で発見されたものを第三期とする。

## 5. 副葬品について

伝左山古墳出土の副葬品については、発見の時期の上か三期に分  
られる。即ち、安政千年壁土採取の土木工事を古墳とともに始めて  
発見されたものを第一期とし、明治17・8年頃福原岱郎氏の調査  
の際に発見されたものを第二期とし、昭和40年、内部清掃と実測  
調査で発見されたものを第三期とする。

### (1) 第一期発見の副葬品

安政千年、倉庫建設にあたる壁土採取の土木工事にかかつて偶然

(2) 第二期  
明治17  
ニ石棺アリ  
リ当て、棺  
棺外で椎原  
所有者塚本  
を刻銘した  
なお、石  
秀之丸井  
推測される  
この二期  
って今はな  
當時、短甲  
個、鐵槍身  
記録によれ  
、2センチ  
1.3センチ  
赤にしを材  
個もこれら  
9.5センチ  
されるが主  
類例がなく  
天草郡千歳  
位憲より秀  
の具輪と  
である。

○直刀身 明  
口のうちの  
シテの大き  
素模で、菊  
の破片をつ  
頭の部分が

見された古墳の内部を探検して、多くの副葬品が確認された。奥室の東と北壁に設置された石棚の上に、鎧1、兜3、環頭大刀数口、鉄錠多数が安置されていたが、この際には祟りを恐れてそのままにし破壊口を封じたが、その後盜賊が侵入し2回に亘つてこれらを持ち去り、そのあと村童等が自由に出入していたというのであるから副葬品はいよいよ失せた。内部施設に至るまで盜難、破壊は免かれない。其の実、福原氏が最初に内部実査を行ったときは、石棚はわずかにその一部を残し、2、3点の鉄片を認めただけであったという。

## (2) 第二期発見副葬品

明治17、8年頃 福原岱郎氏が肥後国誌の「本墳ヲ紀隆村ノ墓トナシ、地中ニ石棺アリ」とある記事の事実を確認するために発掘を行つた結果、一石棺を掘り当て、棺内に環頭大刀二口を含む刀剣五口、貝輪三個、不明の鉄器、鉄片等が棺外で槍身三口がそれぞれ出土した。棺は調査終了後再び埋めて旧に復し、土地所有者塚本平八氏によりその上頂に石祠が建設されたという。明治18年の年代を刻銘した現存の石祠がそれである。

なお、石棺の所在については、それ以前に発掘されたことは肥後国誌の記事で考えられ、棺内の副葬品の中にはすでにその折に散逸したもののがかなりにあると推測される。

この二期にわたつて発見された副葬品の多くは今日に伝そられた。戦災にかかって今は白川町にあつた但馬県前県教育会明麗館に保管されてきたが、当時、短甲一領、環頭大刀二口、脛当、若しくは籠手と思われる鉄製品の残欠二個、鉄槍身二口、貝輪二個があつたという。石棺内より出土した貝輪は発掘者の記録によれば三個となつてゐるが、この当時は二個になつており、一つは長径4・2センチ、短径1・0、3センチの大きさで、他はこれよりやや小さく、長径1・1、3・5センチ、短径1・1、9センチ、ともに幅広く、中央の孔が割合に小さく赤にした材料にして作られたものである。福原氏の記録によれば散逸した貝輪一個もこれらと同一形式になる、半分欠損し、長径1・0センチ、中央孔の長径6・9・5センチの大きさであったという。この種の貝輪は石器時代遺跡より多く発見されるが主体人骨の腕に佩用されたものであろう。然し古墳出土としてはあまり類例がなく珍らしい。剣の類では金属か石製が通例である。肥後で日奈久古墳、天草郡千歳島古墳の出土品と共に稀にみる遺物として、伝左山石棺貝輪が出土の位置より考へて腕輪として使用されたものと思われ、これが前記のように歴史以前の貝輪と、後の車輪石、石剣、銅剣等との系統上の連携を示す点で興味あるものである。

- 直刀身 明麗館陳列のころまで三口を存し、内二口は環頭大刀で、石棺内発見五口のうちの三口と思われる。大きいほうは総長70、3センチ、及幅2、38センチの大きさで、環頭は同じ鉄で作り茎の先につけられ、長径4、4センチ大の素襷で、菊水町舟山古墳出土大刀とよく似ている。小さいほうもまた同型で、身の破片をつなぎ合わせれば同じ長さとなる。三口目のは、茎の部分を失ない、柄頭の部分が不明であるが、現長68、1センチ、普通型の直刀である。福原氏の

通常封土の上  
難で、かそつ  
るであろう。  
陪葬には壮麗  
堂が封土の第  
二で、両者の  
そろ上にもま  
さまに吾人の

報告書では総長3尺4寸8分の長さのものもあつたことも見えますが所在不明となつて  
いる。

○槍身 巻見当初三口あつたのが明麗館のころあつたの二口分で、うち一口はひどく破  
損し形もわからぬ。見得るは一口だけである。総長20.3センチ、總袋の径3  
センチ、袋部と鋒との間にくぎりも認められず、断面菱形をなし、古墳出土の槍身  
として最も多い例である。

○短甲 一領あり、石室内出土の遺品として最も注目をひくものとし、大型鉄製品の  
原型をよくとどめている。菊木町舟山古墳の甲とともに県下出土短甲の双壁とされ  
た。総高47.4センチ、薄ての鐵板を横に矧ぎ合わせて鉄でとじ、周囲に覆輪を  
施す形式で、右側へ開閉し正面の胸で合わせる構造となる。その標式的なもので  
あるといえよう。錐上の革綴や部分金具などは失われている。

○異形の鉄製品 欠損し原型を知ることは困難とされ二個分はあるものと考えられる。  
下林繁夫氏（済々黨教諭）はこ北を籠手と見たが、その輪郭が朝鮮大邱の一古墳出  
土の遺物、及び筑後月の岡古墳巻見のものに似ていることから推せば福原氏の腰当と  
いう見解が妥当だと思う。何れにしあ珍らしい遺物である。

以上述べたほかに伝左山古墳出土品として形状を止めているものに兜二個と、  
鎧一ヶがある。

○兜 二個ともに眉庇付冑の類で、その一つは孔が小さく、これを巧みに矧ぎ合わせ  
上部に受鉢形の飾りがあり、形が上総清川村和泉大仙陵、筑後月の岡等の古墳出土  
の金銅張り兜と共通する点が多い。大きさは鉢の長径23.3センチ、短径18.8  
センチの大きさとなつていて。

他の一つは前盾に比し粗製で、小孔がわずかに大きく、上部の横円形が扁平にな  
り飾りがない。

○鎧 鎧部に欠損の状態が認められるが、ほぼ原型を残し、各部に見ゆる穿孔によ  
り両肩より胸の上部を覆う着装の状態を察知することができる。

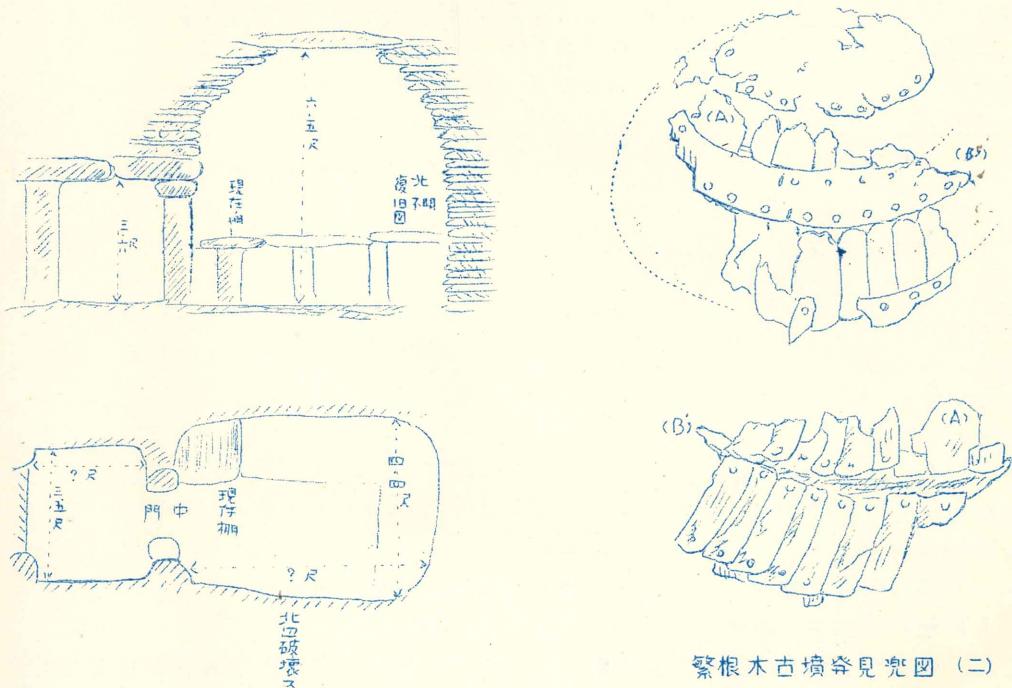
以上述べたところを総括すると当古墳の示す遺品は武具において顕著である。この  
武具のみがこの古墳本来の副葬品のすべてであるか否か、なお研究の余地がある。す  
でに述べた遺物の上から石室内に葬られた被葬者は男性であつたと推測が得られ、またこ  
北らの武具類が江田舟山古墳、筑後月の岡古墳、和泉大仙陵等種々の点より年代  
を微證し得る遺跡の出土品と同一様式であることは、ひいて本墳自体の造営年時の推  
測も加えさせるものとして重要視されるものである。

この造営年代と関連して一考を要することは、さきに述べた二個の構造部分の何れ  
が果して本墳の主体として營なされたものであるかという問題である。この場合陪葬  
の簡易に標準を置くとすれば石棺のほうが後のものと考えるのが穩當だと思うが、両  
者の封土に対する位置関係に基づいて、こ北を日本の古式古墳に於ける主体の位置の



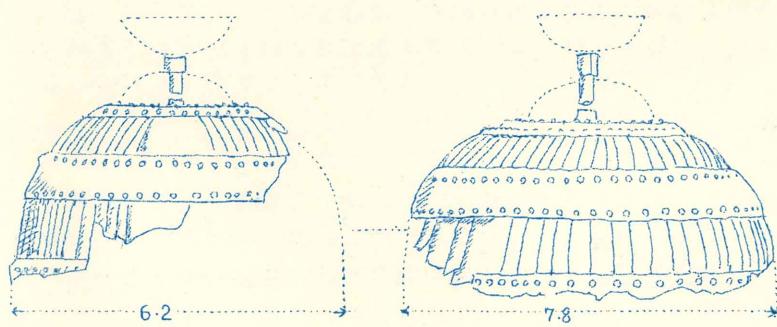
繁根木古

通常封土の上部にある点に対し、上部の石棺が後の埋葬であると解することは頗る困難で、かくて石棺を以て陪葬にかかる構造部分とすることに入々の意見は一致するであろう。集してそらだとすれば、本墳の示す状態は、主要の部分には簡単な棺で陪葬には壮麗な石室を有するものとしなくてはならない。たと既に述べた通りこの石室が封土の第一段に基底をおくことから推し、また墳内に載する武具類の上から考へて、両者の間に多くの年時の距たりを予想しがたい。そのことは上代の陪葬を考へる上にもまた同時に相異なる二型式の存在を想定する上にも寄与するものとしてまさに吾人の関心に値すべきものである。



繁根木古墳発見発見図 (二)

繁根木古墳石室形状図



繁根木古墳発見発見図 (一)

腐工芸品であ

長さ2セン  
に、2本の金  
く光つた末尾  
さな金地の球  
個ずつつけて  
くず玉型の金  
世。さらに二  
千の割に大き  
たものである。

この出土例  
のニュースで  
いう。本県内  
玉名市玉名の  
域に集中して

古墳時代中  
が国に盛んに  
うになる。分  
化はその層段  
その流域に現  
玉名、山鹿の  
金銀、白銀  
つた。伝左山  
金製環、各  
玉類

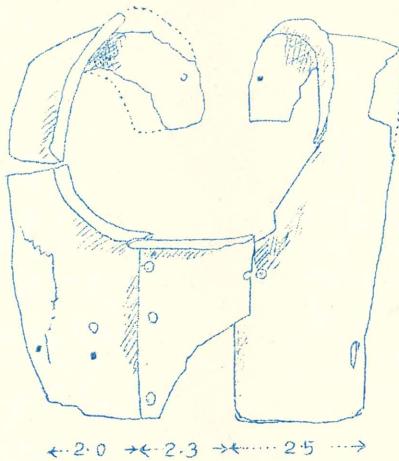
この時代の  
ある。玉類も  
から出土する  
治以前の過去  
伝左山古墳は  
玉、管玉ら  
の勾玉

群玉の中  
かり、光沢  
げて半コの  
その小孔の  
管玉

管玉は、  
たものであ  
墳から出  
ここでは

\* 伝左山古墳の発見から過去において行われた調査の経過については、本文一頁 2 墳形、以下明治三十年十月の福原岱郎氏（当時熊本師範学校教諭）の稿になろ「玉名郡繁根木古墳出古物参考書」及び下林繁夫氏（当時県委員、清々堂教諭）の実査を主として作成された大正十四年刊行の「熊本県史跡名勝天然記念物報告二、熊本県下にて発掘せられたる古墳の調査 玉名郡繁根木の古墳」の項に基いて記載紹介したものである。

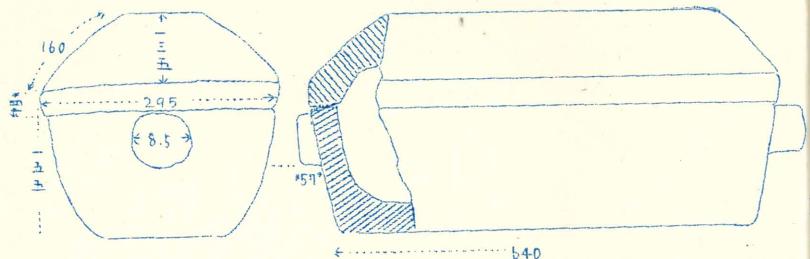
XXXXXX XXXXXXXX



繁根木古墳発見頸體図

### (3) 第三期発見副葬品

玉名市では、  
当古墳が全国的に名のある貴重な文化財であるため、昭和四十一年、古墳敷地の北半部を黙收次いで南半も國より払い下げを受け、古墳敷地の全面を市有地



繁根木古墳上層部 石棺図

として確保し古墳の保護に万全を期した。これを機として玉名市教育委員会は荒廢していた古墳内外の清掃と実測調査を行つた。その際に耳飾り、首飾りなどの装身具をはじめとし、鐵鏃、刀劍や短甲などの鐵片、馬具片その他のものが多数発見された。因みに当古墳の副葬品の遺存については、前記の通り過去二期に亘つて発掘され、各種遺物も微收されておりその後は皆無とされていただけに第三期発見では関係者を極度に驚かせた。以下その出土品の細部について述べることとする。

#### A. 装身具類

##### 1. 金製垂飾付耳飾り

伝左山古墳より出土した金製耳飾りが二種、二個ある。一つは墳外へ推出した土中よりガラス片、陶磁器片、其の他の塵芥に混り筛にかかつて発見された垂飾りを着けたものと他は、内部の清掃中奥室床面の北壁に接する地点から発見された金鏡とがある。

垂飾りのついた耳飾りでは、母環、補助環、根締めの飾り玉、垂孔飾りの四部からなる高度な細金細工と進歩的な熔接技術を駆使して造られた高級華麗な貴金

屬工芸品である。

長さ2センチ、頭部の径0.7センチの魚雷型中空金地に頭部の最大部分と中央に、2本の金糸をより合わせてつくつた環帯を一巻づつ入れ、漸次小さくなつて鈍く光つた末端に螺旋状、三重に密着させてつくつた垂札飾りと、径0.5センチの小さな金地の球形を、金のより糸を一巻いて上下等分に分け、同じ金糸で小円を9個ずつつけて9糸の花形に表わし、各糸の隙間に金の小粒をろう付けにして飾つたくず玉型の金具の中心を縦に貫通した二条の金線を垂札飾り金具と補助環に連結させ、さらに上にわずかに開いてハート型をした長径1.5センチ、短径1.3センチの割に大きい金の母環につなぎ、母環の切札目で耳だけをはさんで飾るようしたものである。

この出土例は全国的に数が少なく、専門的にこの種の研究を進めている人の最近のニュースでは玉名市内出土の大坊・伝左山の二例も加えて全国で32例があるという。本県内では当伝左山出土品を除けば、菊水町舟山古墳出土品(明治6年)と玉名市玉名の大坊古墳出土品(昭和38年)3点があるだけで、すべてが菊池川流域に集中していることに重要な歴史的意義があることも考へなくてはならない。

古墳時代中、後期頃、大和朝廷の大陸進出に際して、進歩的な彼の地の文化は我が國に盛んに吸収され、古墳造営や豪族の生活様式は大陸的傾向が強く表われるようになる。分けても彼の地に全盛を極めた南朝鮮の百濟、任那、新羅等の高度の文化はその隣接地北部九州に直輸入され、次いで有明海より菊池川をルートとして、その流域に運び出されたものであると考えられる。

玉名・山鹿地方の古墳の壁画に彩色象形文が採用され、副葬品に半島や大陸輸入の金銀、白銅製品が加えらばなど、彼の地のぞいきようは極めて幅広いものとなつた。伝左山古墳はこうした影響下に造営されたものの一つである。

○金製環 径0.3センチ、長さ6.2センチの金線を円型にしたものである。

○玉類

この時代の豪族の身札飾り、権威を誇示するものとして金製耳飾と並んで玉類がある。玉類もこの時代に全盛期をつくり、また終末期ともなつていく。各地の古墳から出土するその種類もいろいろあり、数も限りがない。伝左山古墳出土では、明治以前の過去数回の盗難と、明治以後再度の発掘で多くが失喪したものと思われ、伝左山古墳ほどの規模をもつ優れた古墳出土品にしては少々量であつた。ここでは勾玉1、管玉1、内一つは断片、ガラスの色小玉403個が出土している。

○勾玉

排水の中から筛にかかりて発見されたものである。碧玉で造られ全面磨きがかかり、光沢あり濃緑色を呈する。長さ3センチ、頭部を大きくし、後尾を浅く曲げて半コの字型に作り、円い頭部の中央に横に小孔を設けた普通型の勾玉で、その小孔にひもを通して他の玉類と組み合わせ、首飾りとし用いられたものである。

○管玉

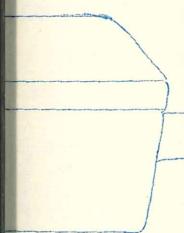
管玉は、勾玉、小玉などとともに組み合わせ、主として首飾りとして用いられたものであるが、この時代になつてその使用は頻繁であつたため、この時期の古墳から出土するのは通例であろう。

ここでは二種5個が出土した。一つは長さ2.7センチ、上下同じ大きさで、直



25 →

頭鎧図



委員会は荒廢  
りなどの装身  
が多数発見さ  
に亘って弁持  
に繋る期発見  
ることとする。

外へ推出した  
見された垂飾  
から発見され

れ飾りの四部  
級華麗な貴金

径約1.7センチの円筒形で、前記勾玉と同質の碧玉製の磨き上げの同じ組み合わせのものと考えられる。

他の4個白み帶びた石質が用いられて居るが、長さに多少の相違があり、長いほうで2.5センチ、最も短かいほうで2センチ。いずれも両端が小さく、中ほどはわずかにふくらみのある円筒形で直径約1.4センチの大きさになる。他の一つはその残欠である、磨き上げの表面に浅い風化が認められる。小玉やその他の玉類と組み合わせ、首飾りとして身を飾つたものであろう。

#### ○小玉

この時代の古墳出土で圧倒的に多数を占むるものは小玉類であろう。多くはガラスで造られ、粒の大きいものは大豆ぐらいの大きさで、藍色を呈し、中心に小穴を通して両端を平らにすり磨いたものが多い。小さいものは粟粒の半分にも満たないものがあり、黄、白、うす緑、綠、群青など色素を加えた色どりがあり、総数403個が出土した。

#### B. 武具類

武具としてまとまつたものは鉄鎌だけで、他は甲冑、刀剣の残欠片であった。明治年間に発見の残片であろう。

鉄鎌は原型を保つてゐるものも多く、床面の南東部敷石の上や、東障壁と壁との隙間に多く置かれて、無数の断片は墳内床面全域に散乱していた。また排土中より発見された破片も数多く、過去において何回となくかき乱されたのが濃厚である。

長さも形も大同小異あり、その数はおよそ30本分はあると推定される。1.6-1.7センチ位の長さの根元近くにまちの刻みのある長首の尖頭式で、尖頭の割に細いもの長いもの、片刃あり双刃あり、か索りのあるもの、なりものなどさまざまである。その他小片多数あり、リットルの容積に相当する量を出した。

#### C. 馬具類

断片で発見された。轡の部分で、はみのつなぎ環、鏡板環の破片数片が排土中より発見されている。残欠で全体の形状を確認することは困難であるが、他の古墳（川路古墳、馬出古墳）の出土例から考へ、鏡に付着したつなぎ金具が認められ轡の一部であることがわかる。

#### 6. まとめ

伝左山古墳が安政年間に倉庫建設の土木工事を契機として偶然に発見されて以来世の人々の観心はここに集中され、明治年間に至つて福原述郎氏、下林繁夫氏等の調査によつて、内部構造や副葬品の状態が明らかにされたことは前に述べた通りであるが、二段構築による円墳の封土下底に、前室と奥室を設けた板石小口積み石室を築き、上層の封土内に石棺を封じたという他に多く例を見ぬ珍らしい複式古墳であることが明らかにされ、祭根本の古墳として全国に紹介された。その後当県では熊本県史跡名勝天然記念物報告書に記載して、大正十四年にこ北を出して以来さらに世の注目は深くなつた。その間発見当初確認された玄室石棺は破壊され一部を残

していたといふが、現在ではその形跡も認められない。

戦前こうまで繁根木八幡宮の裏手一帯は人家もまばらで、人里はなれ荒涼として人の足をひくようなところではなかつた。八幡宮裏手より、縮荷堂前を北へ行き、無心に茂つた笹藪の中を南へまわつて古墳の穴を見つけ出し、おそろおそろ中左の毛いたものであつた。別に何かを得ようとする目的があるわけでもなく、ただ見てみたいと思う好奇心からだけであつた。中は小さい石をきれい積み甌ねで丸いよう、四角いような部屋になり、一面まつかで、板のような石が折り重なり、かれたかずら草が一ぱいにはびこつて怪奇漂ようありさまであつた。壁におおわれた丘の上には石祠が一つあり、桜の古木が何本かあつた。山桜ではあつたが春の開花期には見事で、ある新聞社の肥後桜名所選定の候補にあてられたこともあり、その頃は「伝左山の桜」としてかなりに知られていた。桜のある丘の東たもとにそまつな瓦ぶきだつたと思うお堂があり、古びた大きな木造の二体の観音さまがまつてあつた。堂の前にもいくつかの石仏や石塔がならんでいて、何か由緒ありけに思われてならなかつた。その後になつてこれらお堂、観音さま、石仏などのこらす県事務所南東の一隅に移されているが、もとこの付近にあつた寿福寺の遺物らしい。

幼少のこち、まちに遊びに出たついでに伝左山を見にいつたことが今なお記憶に残つてゐる。

このころ伝左山古墳も人々の観心から遠のいて、かえりみる人もなく放任されたままになつてゐたようで、戦前、戦後ごろの荒れようは一方ではなかつた。その後北側の道路拡張、国道208号線の開通など急速に進むと、付近に家々が立ちはじめ、今日では古墳周辺は空地もないまでに押し詰められ、付近に民家ができると、古墳石室内は塵芥捨て場に利用され、生活雑物が一ぱいに積つて臭気擣を突くほどになつてゐた。見ろに見かねた町青年団や或宗教団の奉仕で墳上の笹刈り、墳内の清掃が幾度か行われたりした。

近来になつて機械による大規模の土木事業が盛んになると、古墳を取り扱つて新企画の事業を興そうとする動きがあつたが、見識ある市当局はいち早くこの問題を解消させた。個人所有になつてゐた古墳敷地の北半を買収し、次いで国有地の南半部の払い下げを受け、敷地全面を市有地として確保し、古墳の保護に万全を期することとなつた。

この意義を深く認識し、古墳に対する関心と敬虔の心情を兼持し、先人の遺した文化をもとにしてこれから的新し文化創造に努力することが私たちに課せられた最大の責務であると思う。

※ 伝左山古墳出土品で第1期・第2期弁見のもののうちで短甲1領、環頭大刀2口、直刀片1枚、貝輪2個が熊本大学教育学部託 熊本市立博物館に、第3期(昭和40年8月)弁見品1枚が文化庁買上げ、東京国立博物館にそれぞれ保管されている。

( 昭和45年12月1日 田添記 )

昭和46年2月 指定

熊本県玉名市 繁根木

伝左山古墳 関係写真

熊本県玉名市 教育委員会



1 伝左山古墳 墓丘南面

中央の穴は安政4年発見当時の破壊孔で、  
玄室天井の南端にあたるところ。

2. 北方より見た佐左山古墳々丘

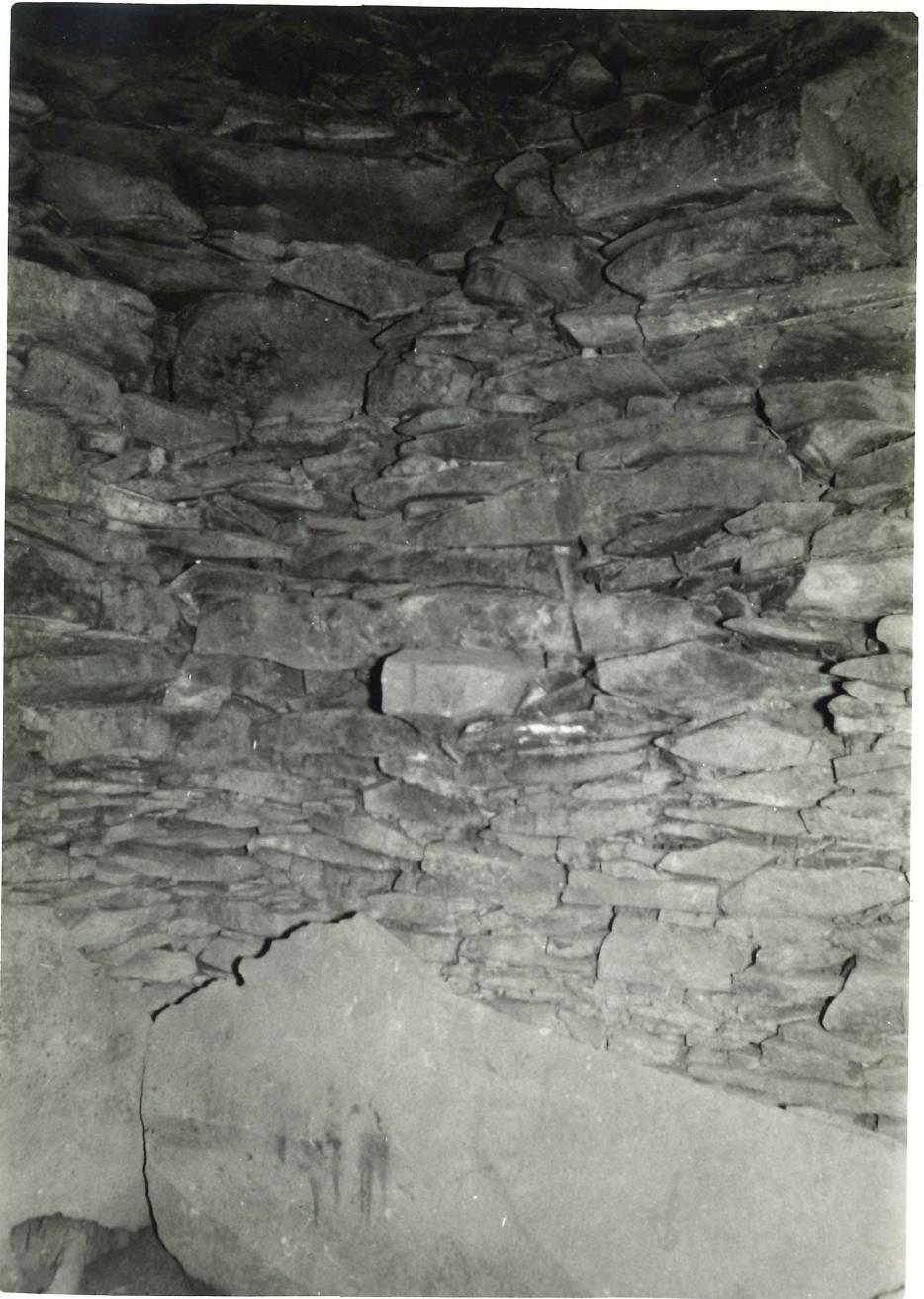


3. 基座東壁面 東方日出の景



4. 古室東縁閣の小口積みの状態





5. 玄室 東壁面小口積み及び凸起石(中央)を示す



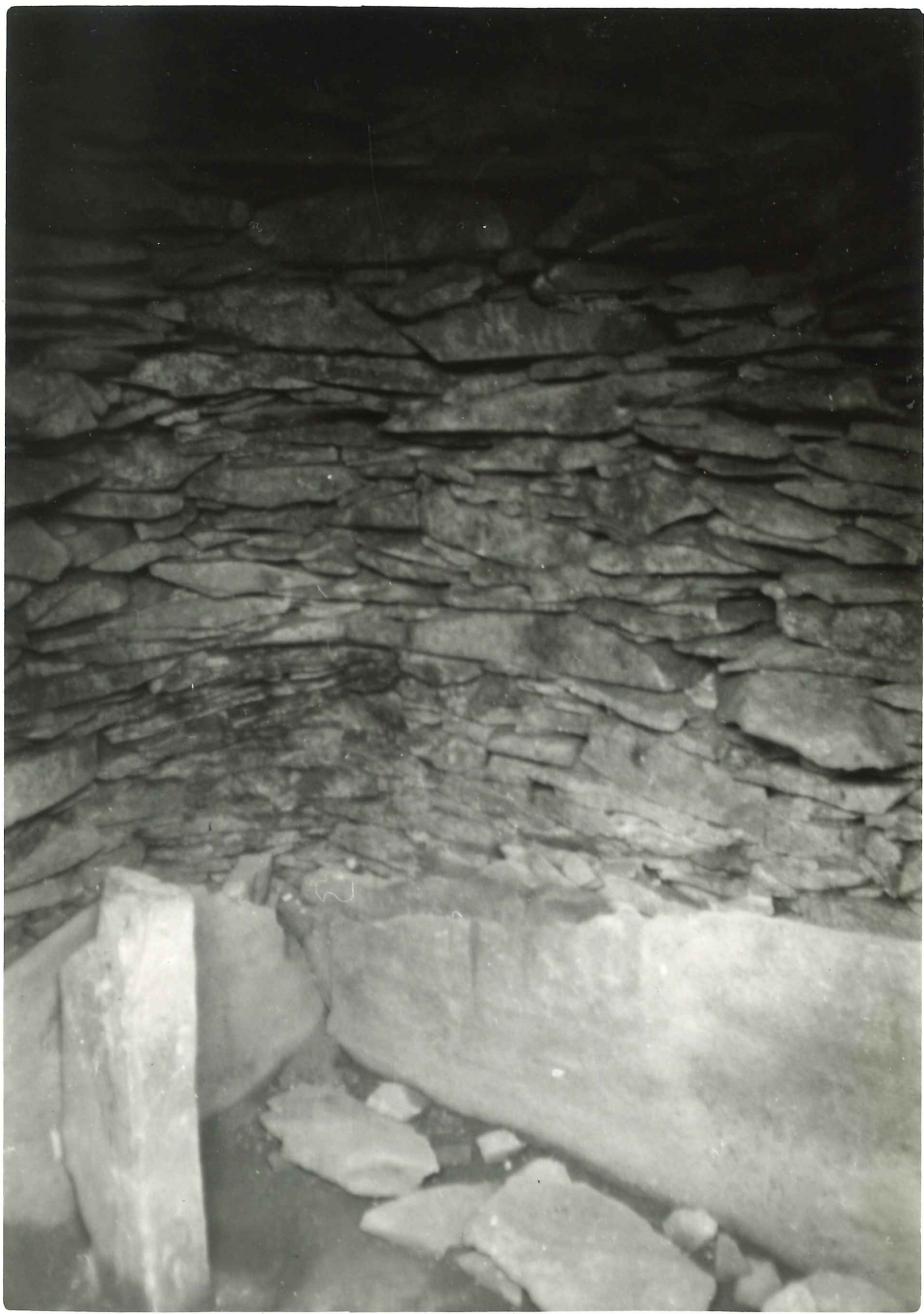
6. 玄室 北西隅小口積み及び床面石郭の一部



八、洞内壁小砾石层及风化裂隙



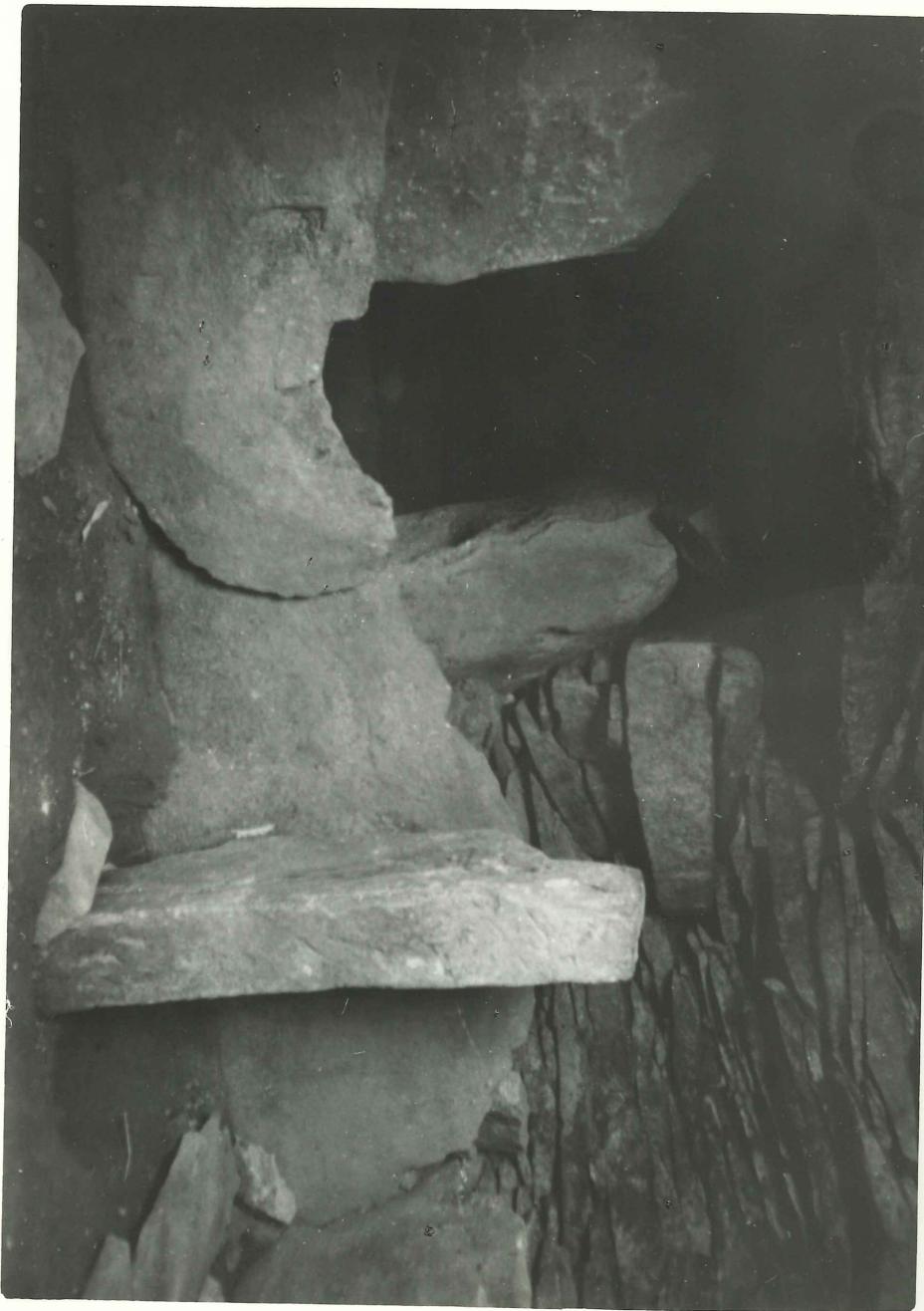
80. 光陰の樹



9. 玄室 西北隅及び床面石部の状態



10. 前同



11. 東面西石部及び第二藻門の構造



12. 玄室北西隅 石郭・小口積壁・天井の一部



13. 玄室より見た第2羨門部及び西壁面



14. 玄室第2義門及0°上層壁面



15. 玄室天井部石組



18. 垂飾り付耳飾り (拡大)



19

矢豆甲

(熊本市立博物館藏)

20

出土品

鐵鏹

(米根式)

10

